Die Eiche ディ アイヘ
http://www.jdg-chiba.com

Japanisch-Deutsche Gesellschaft der Präfektur Chiba
〒270-2214松戸市松飛台556-12
Tel./Fax: 047-385-1456
Mail: info@jdg-chiba.com
協会Home Page

2025年第31回ドイツ軍人慰霊祭

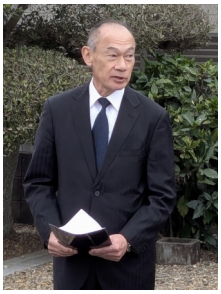
理事 木戸秋 圭一

11月23日（日）習志野霊園にて第31回目となる「ドイツ軍人慰霊祭」が約150名の参列者を集めて執り行われました。来賓としてドイツ大使館よりフート首席公使、ペルズィッケ駐日ドイツ国防武官ご夫妻、ブライデンバッハ次期駐日ドイツ国防武官ご夫妻他、自衛隊第一空挺団習志野駐屯地 藤澤第1科長他、千葉県からは国際課山下課長、船橋市からは林副市長、西村環境保全課長、習志野市からは遠藤副市長、小熊教育長他にご臨席いただきました。フート首席公使は埋葬されている日本兵にも献花をされました。

フート首席公使

この慰霊祭に特別の味を添えているのが津田沼高校オーケストラ部50名による演奏です。松田輔（たすく）先生の指揮のもと参列者全員がドイツ国歌斉唱。110年前に第一次世界大戦が終結し、祖国に帰国する直前に蔓延したスペイン風邪（インフルエンザ）によって家族との再会を果たせぬまま習志野の地に眠ることとなった30名のドイツ軍人慰霊碑の前に白菊の献花が厳かに行われました。若い生徒さんの心のこもった演奏、習志野第九合唱団の皆様にも熱唱いただき、30名の軍人のお一人ひとりのお名前が丁寧に読み上げられたことにより、参列者の皆さんは故人に思いを馳せることができたと思います。

津田沼高校オーケストラ部



ドイツ軍人の名前を読み上げる田中重伸会員

その後、陸上自衛隊習志野駐屯地内に移動し、60名が直会に参加、昼食を共にしながら歓談に花が咲きました。木戸会長からは当時捕虜のひとりであったドイツ軍人ヨーゼフ・エリッヒ氏の曾孫にあたるTobias Oelligさんが、今回はるばるドイツから駆けつけてくださる予定だったが、仕事の都合で残念ながら直前になって来日が叶わなくなってしまったこと、来年の慰霊祭には、是非お越しいただけることを楽しみにしている旨のお話しがありました。また、故平尾名誉会長夫人からのご寄付により制作した「千葉県日独協会旗」が初めて披露され、和やかな雰囲気のもと日独の交流を深め、最後は記念撮影をもって第31回目の慰霊祭を終えました。

ドイツ兵、日本兵への献花

この機会に少し歴史を振り返ってみたいと思います。100年以上前の出来事であり、時代の流れと共に史実が風化しがちなこと、私の周りの人にこの一連の話しをすると大半の方はそんなことがあったとは知らなかったという話を耳にするにつけ、これまでも何度か言及されてきたかと思いますが、あらためて整理し、初めてこのDie Eicheをご覧になるられるできるだけ多くの方々にこの史実を伝承していくことが大事ではないかと思い、紙幅を割かせていただきます。1897年ドイツは清国から膠州湾を租借し、青島に要塞を建設、東洋艦隊を配備。青島はドイツ帝国の東アジア拠点となり、軍港・貿易拠点として重要な位置を占めていた。1914年第一次世界大戦勃発。日英同盟に基づき、日本はドイツに最後通牒を出したが、拒否されたため宣戦布告。ドイツのヴァルデック総督は兵力に圧倒的な差があったことから、無意味な犠牲を避けるため、降伏を決断し、ドイツ人捕虜4,700名が最終的に日本の６ヶ所の収容所に送られる。その中の代表的な俘虜収容所が映画「バルトの楽園」の舞台にもなった板東俘虜収容所であり、習志野俘虜収容所であった。習志野俘虜収容所の所長は西郷隆盛の嫡子の西郷寅太郎大佐。日本は国際法（ハーグ陸戦条約）に基づき人道的な待遇で人権を尊重し、地域住民との文化交流（音楽、食文化等）を促進した。捕虜の中には、パン職人、ビール醸造家、製菓技術者などがいて、これが後に「ユーハイム」（バウムクーヘン）、「ローマイヤー」（帝国ホテルでハム・ソーセージ製造を指導）、第九の演奏へと脈々と繋がり、日本でドイツ文化が浸透し、根付く礎になったという思わぬ展開となった。

習志野が日本でのソーセージ発祥の地となったのもこのような経緯であり、千葉県で第九の演奏が盛んというのもこのストーリーと無縁ではないようです。このように日本に根付いたドイツ文化がこのような背景を通じて現在に至るという史実を是非この慰霊祭を通じて若い方々に伝承していければと思います。

今回、ドイツ（旧東独側）から日本の工芸品（特に漆）に興味

を持たれて勉強に来ている若い教師を慰霊祭にお連れしました。10月に開催した「いちかわドイツデイ」の当協会のブースに来られたことが縁で、この慰霊祭にも参列したいとの希望が出され実現しました。ドイツでもこの俘虜収容所に関する一連の史実はあまり知られていないとのこと。本人も100年以上前のことをこうしてドイツ大使館や自衛隊の方々をお招きして盛大に且つ厳粛に慰霊祭を執り行う姿に感銘を受けたとの感想を述べていました。この教師はドイツ帰国後、このストーリーをあまたのドイツ人に伝えてくれることでしょう。こうした草の根の日独間交流が、今後さらに重層的に広がっていくことを心より祈念いたします。

新年のご挨拶

2025年を振り返り、26年に向けて

千葉県日独協会会長　木戸　裕

新年おめでとうございます。

皆様、お健やかに新春をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。新しい年の皆様のご多幸とご健勝をお祈り申し上げます。

昨年（2025年）を振り返りますと、新春講演会で、獨協大学の相澤啓一教授が「日独文化交流の課題」をテーマにお話しくださいました（3月1日）。続いて総会の記念講演では、青山彌紀会員から「文化をめぐる冒険」と題してお話しいただきました（5月10日）。どちらも講師の豊富なドイツ経験を踏まえた、たいへん含蓄あるご講演でした。

夏には、土屋有里常任理事、土屋実穂会員による音楽イベント「歌で巡る愛の形～イタリア、日本、ドイツ、三者三様の愛情表現」を実施できました（8月16日）。参加された皆様からたいへん好評を博しました。

秋には、第一次世界大戦中、習志野俘虜収容所で当時蔓延したスペイン風邪により亡くなったドイツ兵士を弔う「第31回ドイツ軍人慰霊祭」を約150名の参加者を得て、粛々と、恙なく実施することができました（11月23日）。これもひとえに植松健専務理事・事務局長を先頭に会員一同一致協力して取り組んだ結果の賜物だと思います。ドイツ大使館をはじめとする関係各位にも厚く御礼申し上げます。現行の高校歴史教科書（清水書院）のなかにも、当協会の「慰霊祭」を紹介する記載があり、われわれの活動のもつ意義が徐々に社会的に知られてきていることをうれしく思っております。

青壮年部が企画したオンラインによる2つのたいへん興味深い内容の懇談会も成功裏に終了することができました。浅川千尋・天理大学名誉教授の「ドイツにおける動物愛護」（9月20日）、工業デザイナーの井上晃良氏（inoue design 代表）による「ドイツ建築・デザイン」（11月29日）のどちらも、勝見浩明・青壮年部長、南木雅弘会員と講師との間で事前に交わされた入念な準備を踏まえたもので、積極的に会員が参加する「座談会方式懇談会」として、今後の「モデルケース」となるものと考えております。

このほか、マイト・ピア智子氏（独日協会ニーダーライン会長）率いるデュッセルドルフからの奨学生の皆さんと、昨年も当協会会員の間で充実した交流の場をもつことができ、たいへんうれしく思っています（9月24日）。「市川ドイツデイ 2025」でも、例年通り展示ブースを設置し、ご来場の方々に当協会の活動について知っていただくことができました（10月4／5日）。

デュッセルドルフ市、ノルトライン・ヴェストファーレン州等の主催により実施された「デュッセルドルフの夕べ」には、会員の皆さんと一緒に私も楽しいひとときを過ごさせていただきました（6月16日）。翌々日には、来日されたクリスティアン・ツァオム副市長を代表とするデュッセルドルフ市使節団の方々との「昼食会」を通して、たいへん意義深い交流ができたと思います（6月18日）。

また、千葉県とデュッセルドルフ市との間で行われている日独アーティストの交流事業に、当協会も笹生健司理事を中心に寄与することができました。さらに、山本久瑠実理事の訪独をきっかけとして、ビーレフェルトの独日協会との交流も開始されたこともうれしいことでした。

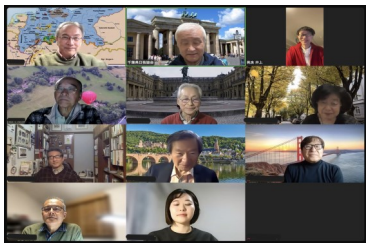
そのほかにも、会員の皆様とともに多彩な活動を展開してまいりました。その詳細につきましては、本誌各号をご覧いただけますと幸いです。あわせてこの場を借りまして、勝見浩明編集長をはじめとする編集委員の皆様、ならびにいつも興味深い原稿をお寄せくださる会員各位に心より感謝申し上げます。

さて今年（2026年）は、当協会創立30周年を迎えます。「歴史と共に未来へ」（Durch die Geschichte in eine harmonische Zukunft）」をキャッチフレーズとして、30周年記念式典を来る10月24日(土)に開催する予定です。皆様が親しく集い、気持ちの通じ合う、思い出深い式典となるよう、運営委員会を中心にその企画に鋭意取り組んでおるところです。会員の皆様からのご要望、ご意見等も、ぜひお寄せいただきたくお願い申し上げます。私としましては、30周年を機に、協会内部ではシニア・壮年・青年間の「コラボレーション」、協会外部では、他の日独協会・独日協会との「コラボレーション」のさらなる推進を目指してまいりたいと考えております。

本年も、「千葉県日独協会に入会してよかった」と会員の皆様に思っていただける会を目指して、微力ではありますが取り組んでまいる所存です。引き続き、何卒よろしくご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

青壮年部主催 座談会
「ドイツ建築・デザイン」
会員　南木　雅弘

昨年、11月29日に開催した第二回懇談会には 12 名の会員の皆さまにご参加いただき、 盛会のうちに終了できましたことを、講師の井上様をはじめ、参加していただいた皆さまに 厚く御礼申し上げます。



今回の内容につきましては、私自身も在独時代やそれ以前のドイツ旅行も含めて、テーマ となった色々な歴史的遺産をだいたいこの眼で見て来てはおりましたが、まだまだ建築家、 デザイナー、芸術家の業績を追いかけるという知識の「点」でしかなく、彼らが生きていた時代や世界との繋がりといった二次元、三次元的な理解がなされておりませんでした。しかし、今回の懇談会でそのような理解が深まるのを感じることができました。

特に産業革命によって大量生産が可能になり、安価で物品が購入できるようになった代 償として粗悪で醜い商品が大量に流通するようになった反動から、「職人の世界へ戻れ」という掛け声の下、芸術運動であるアーツアンドクラフツ運動が英国で起き、続いて、フランスで はアール・ヌーヴォー、ドイツではDer Jugendstil（ユーゲントシュティール）という芸術運動が起き、それらは日本の影響を受けていた等、我々青壮年部が現在研究に取り組んでいる 一つのテーマである「第二次世界大戦前後のドイツや近隣ヨーロッパの歴史」を深める点で大変参考になりました。

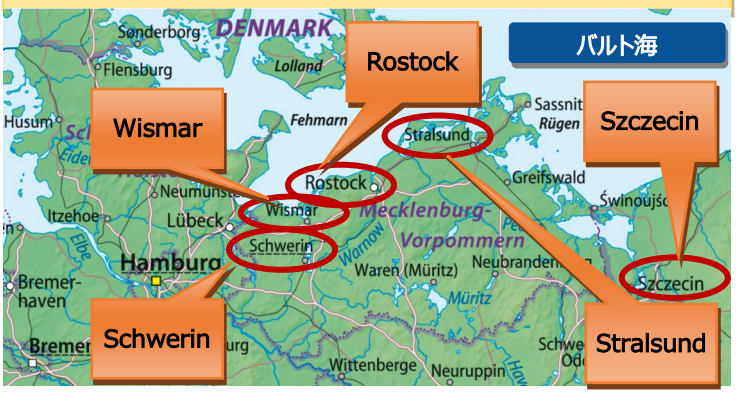
Deutscher Werksbund（ドイツ工作連盟）やBauhaus（バウハウス）運動が、これらの芸術 運動の流れの中で誕生したことも興味深く、また、これらのドイツの「芸術的な運動」がアール・ヌーヴォー、Der Jugendstil（ユーゲントシュティール）の元になった日本に戻ってきて、戦後の桑澤研究所等、日本のデザイン・建築芸術等に多大な影響を及ぼしていた というのは大きな驚きでした。正に近現代では世界的な芸術の交流・交換が行われていたこ とを知り感慨無量でした。

昨今、日本人ファーストとか言われていますが、建築やデザイン芸術を見る限りでも、我々人間社会では世界全体で「人間生活にとって良いもの」追求してきており、そこには国はなく、芸術を通じて人間生活を豊かにしようという考えがあることを感じました。芸術が特定の偏った考え方で制限される時代は、ナチのような独裁時代であり、 芸術が我々の生活に生き生きと関わるためには、自由な空気が必要であるということを学ぶことができた時間でした。著作権の関係にて懇談会の中で触れられた、Bruno TautのBerlinのGroßsiedlung Britz-Hufeisensiedlungの実写を私が撮影した写真で掲載させていただきます。

Bruno Tautの石碑

Bruno Taut作　ベルリンにある Hufeisensiedlung（馬蹄型大規模集合住宅）

ドイツの街紹介
北ドイツバルト海に近い
ロストック、シュトラールズント、その他の街
顧問　志賀 久徳



今回は日本とはなじみの少ない、バルト海に近い北ドイツを旅した時の町を紹介します。

ロストック近郊の標識

ハンブルクから車で更に北東に走ると、旧東ドイツンに属していたシュベリーン、ヴィスマール、バート・ドーベラン、ロストック、ヴァルネミュンデ、シュトラールズント（リューゲン島）等の歴史ある町が続きます。

シュヴェリーン城前の筆者

中でも中心の町となるのは、ハンザ都市として栄えていたロストックとシュトラールズントです。

6月の後半のこれらの町には、海と緑と古い町並みが調和した地方都市の雰囲気が残っていました。

ロストックの街並み

最初のシュヴェリーンは湖水地帯の静かな町で、美しいシュヴェリーン城があり、湖に囲まれたお城の周りを歩いて見学し、その優雅さに驚かされました。次は、今も120年以上前のSL機関車モーリーが街中を走る珍しい町のバート・ドーベランへ立ち寄り、線路わきのレストランから、約15キロ先のバルト海の町まで走るSLを見送りました。それから、旧東ドイツで最大の河川港湾都市であったロストックを目指しました。この町は2010年に当協会メンバー29名が訪れています。第2次大戦で破壊された町も、戦後の復興で活気ある町になっていました。

バート・ドーベランの街中を走る機関車

郊外の木組みのホテル・ヘルマンに泊まり、ドイツ料理とビールを満喫して次に備えました。

更に東に進むと、北ドイツの先端のリューゲン島に近い町のシュトラールズントがあり、旧ハンザ都市の立派な古い赤レンガの建物が目に付く町でした。

宿泊した郊外のリンデンホテルでは、旧東ドイツの雰囲気を感じまし

た。

町の中心地には市庁舎と教会が立っていますが、市庁舎の地下のトイレを借りた時に、中年の女性が座っていて聖書を読んでいました。私はお皿に50セントを置き、日本から来ました、と言うと、笑い返してもらったことがなぜか忘れられません。

ヴァルネミュンデの港

その後は道に迷い、リューゲン島の先端までは断念しましたが、翌日にドイツ国境から近いポーランドのシュチェチンの町を目指しました。

シュトラールズントの街並み

検問はなく、原野の中の直線道を走り続けると標識も雰囲気も違うシュチェチンの町に入り、入口が極端に狭く作られたホテルの盗難除け駐車場に車を止めてチェックインしました。

シュチェチンの果物屋

次の日、市の中心までは道で会った親切な青年に案内してもらい、東欧の雰囲気のある市内を見たり現地の人と会話して異国を楽しみました。高級ショップ前で警察官らしき人に写真を制止されたのには驚きました。

翌日から再びドイツに戻り首都のベルリン、そしてサンスーシイ宮殿、ポツダム会議で知られるポツダムへと、南下の旅を続けました。

ドイツ大使館駐在武官主催
オクトーバーフェスト参加記
理事　神田 基成

去る2025年10月16日、駐日ドイツ大使館の駐在武官が主催するオクトーバーフェストに参加する機会を得ました。秋の夜風が心地よい大使館の庭を抜けて会場に入ると、ドイツの民族衣装を身にまとった大使館関係者が陽気に出迎えてくれました。参加者の間にも明るく穏やかな雰囲気が漂っていて、日本の企業関係者のほかベトナムの軍関係者や外交関係者など多様な人々が集まり、文化交流と親睦を目的とした催しとして、ドイツという国の外交関係の国際的な広がりを感じさせる場でした。

神田理事

会場の前方中央には大きなビール樽が置かれ、開会の合図とともに駐在武官が木槌で栓を打ち抜くと、歓声と拍手が沸き起こりました。その瞬間、会場全体が一体となり、オクトーバーフェスト特有の空気に包まれました。まるで本場ミュンヘンのフェストに迷い込んだような雰囲気でした。提供されたビールは、ドイツ本場の製法で作られたもので、芳醇な香りとまろやかな味わいが印象的でした。

食事もまた魅力的で、ソーセージやプレッツェル、ザワークラウトなど伝統的なドイツ料理が並び、ビールとの相性は抜群。賑やかな音楽が流れる中、自然と会話が弾み、国籍や立場を超えた交流が生まれていきました。会場を動き回る駐在武官やビールサーバーを担当した武官令嬢そして大使館職員の方々の気さくな対応も印象的で、形式ばらない雰囲気の中に、互いの文化への敬意が感じられました。

今回の参加を通じて、外交というと堅い印象を持ちがちですが、こうした催しこそが相互理解を深める貴重な場であることを実感しました。笑顔と音楽、そして一杯のビールが、人と人との距離を縮めていく。その温かな空気に包まれながら、文化の力と交流の意義を改めて感じた夜となりました。

北村さんの思い出　名誉会員　杉田房之

在りし日の北村さん

北村さんとは、私の入会前の2012年5月のドイツ旅行で知り合いましたが、80才を少し過ぎていらっしゃるとは信じられない若さに感嘆したことを思い出します。

北村さんの協会活動として、２つのことが鮮明な印象として残っています。

ひとつは、協会の「幟（のぼり）」です。協会行事の会場では「千葉県日独協会」と記した黄色地に青の文字の幟が、眼のつく場所に掲げられていますが、この幟はいつかはわかりませんが、北村さんが自費で制作され、行事の都度ご持参し飾られていました。（その後事務局が新調のものを含め所有。）二つ目は、2011年に日独交流150周年記念にドイツ大使館から日本各地に寄贈された菩提樹の件です。千葉県日独協会を通じて、県内18か所に植樹されました。北村さんはこの菩提樹がスクスクと育って欲しいと人一倍の愛情を持たれ、2015年以降数年間にわたり、特に誰かから頼まれたわけでもないにもかかわらず、個人で電車、バスを乗り継いで、県内の植樹場所に足を運び、樹木の生育状況を記録し、写真に収めました。この成果が、2018年に発足した菩提樹委員会に受け継がれ、現在に至っています。

2年前にお年を理由に退会されましたが、かつてのドイツでの炭鉱仲間「Glück auf」と共にあの世でドイツビールを楽しまれていることを願っております。

今後の予定

■新春講演会（詳細別途ご案内）

講師　ドイツ大使館武官　ラルフ　オリバー　ペルズイッケ大佐
日時　2026年3月7日 16:30-18:00
懇親会　18:00-

■千葉県日独協会理事会（詳細別途ご案内）

日時　2026年4月12日　16:00-
場所　船橋市東部公民館

会員情報

個人会員　猿樂　卓史　　船橋市

法人会員　医療法人 同和会　千葉病院、社会福祉法人清和会、（株）京葉ビル管理、（株）和幸電気工事、バイエルンストゥーベ by ダンケ

編集後記

本号のDie Eiche No.158を編集するに際して過去のDie Eiche 創刊号から現在に至るまでを再度閲覧しました。5年前に「協会創立25周年特別号」と題したNo.133号を刊行しました。その際、SNSを活用したドイツ関連の情報発信、対外連携の強化、会員相互の交流に基づく組織内コアコンピタンスの鮮明化を挙げました。この間、着実に進んでいる領域もありますが、協会設立30周年に向けて懇談会の拡大等、会員の皆様との交流を一層充実したいと思っています。Die Eiche 総集編(I)の巻頭には、平尾第二代会長の刊行に際してのメッセージがありますが、「ドイツ文化に親しむべく、講演会や音楽会を随時開催し、懇親の団欒を通じて日独の友好と会員の親睦を図る（抜粋）」を拝見してこのお考えは、現在も通用、私たちもこの考えで進めていく必要があると深く思いました。（勝見）